



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:41-46.

出生後の早期皮膚接触による父親の対児感情の変化について

木屋 まりこ, 今崎 裕子

# 出生後の早期皮膚接触による父親の対児感情の変化について

キーワード：早期皮膚接触 父親 対児感情 父性意識 愛着形成

旭川医科大学病院 周産母子センター

木屋まりこ

天使大学大学院助産研究科教授

今崎裕子

## I. 緒言

父性意識の向上や愛着を発揮させる為には、出生後早期の視覚接触や身体的接触での相互作用が重要となることが明らかにされている<sup>1)</sup>。しかし、これら先行研究で明らかにされている早期皮膚接触の有効性は、対象が母子に限局されていることが多く、児と父親との関係性に焦点を当てたものが少ない。

本研究の目的は、父親と出生後の児による早期皮膚接触における、父親の対児感情の変化を分析し、早期皮膚接触の有効性を明らかにすることである。

## II. 研究方法

1. **調査対象**：A 助産院または自宅にて出産した産婦、新生児、父親の各 5 名。
2. **調査期間**：2014 年 5 月 26 日～7 月 7 日
3. **情報収集**：早期皮膚接触中の様子を参加観察法で収集。妊娠期・早期皮膚接触後の 2 回、花沢の対児感情評定尺度を用いたアンケートを実施。さらに早期皮膚接触後に、感想や児に対する感情の変化について半構成的面接を実施。内容は了解を得てレコーディングした。
4. **早期皮膚接触の方法**  
オムツのみ着用した新生児を直接父親が抱き、肌と肌を接触させる。児の体温を 10 分後、30 分後に測定。実施時間は最低 30 分以上とした。

## 5. 分析方法

対児感情評定尺度を用いたアンケート結果は接近得点・回避得点・拮抗指数の得点変化を、事例別に集計し比較。半構成的面接結果は、逐語録を作成し、対児感情に関する文章を抽出した。

## 6. 倫理的配慮

研究の目的・方法・参加者の権利について書面と口頭にて説明。同意する者のみアンケートに回答して頂き同意書と共に提出するよう依頼した。

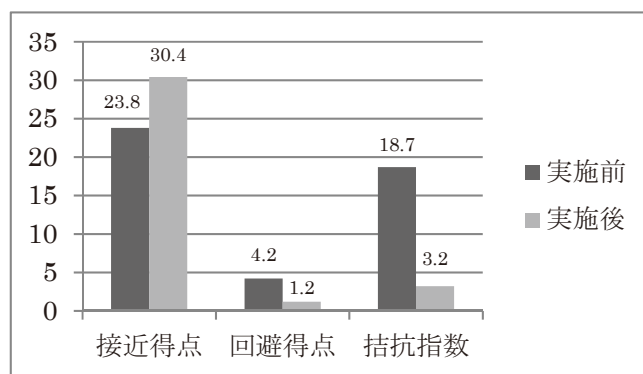
なお、本研究は旭川医科大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

## III. 結果

### 1. 対児感情評定尺度を用いたアンケートの結果

早期皮膚接触実施前と実施後における接近得点、回避得点および拮抗指数、それぞれの平均値を求め、得点変化を比較した(図 1)。平均接近得点は、早期皮膚接触の実施後 6.6 点上昇した。平均回避得点は、早期皮膚接触の実施後 3 点下降した。拮抗指数も同様に、15.5 点下降した。

▼図 1 対児感情指数の平均得点



### 2. 半構成的面接の結果

半構成的面接の内容は、①早期皮膚接触実施後の率直な感想、②妊娠期と早期皮膚接触実施後の児に対する感情の変化、③その他である。結果から、父親の対児感情を抽出し、表に示した(表 1)。

▼表 1 父親の対児感情

|     |                                                                                  |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------|
| 質問① | ・あたたかみがある<br>・体温を感じて、生きているという感じ<br>・今まで本当にお腹にいたんだな<br>・落ち着く、リラックスできた 等           |
| 質問② | ・出てくるまでは他人事、今は自分の子どもが生まれたという感じ<br>・お腹にいる時とは全然イメージは違う、実感するという感じ<br>・特に変わりはありません 等 |
| 質問③ | ・父親なのだという実感<br>・幸せにしていかなければならない<br>・家族で頑張っていこう 等                                 |

#### IV. 考察

##### 1. 早期皮膚接触の有効性

早期皮膚接触の実施前後における、対児感情の変化に関するアンケート調査の結果、接近得点の上昇が見られた。接近得点は点数が高いほど、児を愛着的に受容する方向の感情を示していることから、早期皮膚接触を行ったことで、父親の児に対する肯定的感情が上昇したと考えられた。一方、回避得点は点数が高いほど、児を嫌悪的に拒否する方向の感情を示している。また拮抗指数は、数値が高くなるほど個人の中で回避感情のほうが優先することを示す。この拮抗指数について、花沢<sup>2)</sup>は「接近感情と回避感情との拮抗は、親の児に対する動機や行動を阻害することもある」とし、児に対する肯定感情と回避感情の拮抗が愛着形成を妨げる要因になると述べている。本研究においては、回避得点および拮抗指数の下降が見られたことから、児への動機や行動を阻害せず、愛着形成が促進したと考えられた。

##### 2. 父親の対児感情の変化

早期皮膚接触の実施後、『あたたかみがある』『体温を感じて、生きているという感じ』『赤ちゃんだな、1人の人間だなと感じた』といった語りが聞かれた。前田<sup>3)</sup>は「十分に時間をかけて直接肌と肌とを触れ合わせることで、父親は児の表情や温もり、鼓動、匂いから児を身近に感じることができ、お互いを生きている存在と認識できる」と述べている。児の体温を肌で感じることで、命が誕生したという事実や児の存在を認識・実感するといった、心理的变化が生じたと考えられる。さらに、『幸せにしていかなければならない』『家族で頑張っていこう』という語りも聞かれた。難波<sup>4)</sup>は「父親が早期に児と接触する機会をもつことで、育児動機が高まる」と述べている。児を家族として受け入れ、父性意識を発展させ、育児動機を高めることができると考えられた。

##### 3. 変化が無かった点

妊娠期における対児感情と、早期皮膚接触実施後における対児感情の変化に対し、事例2、4、5の父親が『あまり変わらない』と回答。事例4は『上のお姉ちゃんの時は(対児感情の変化が)あったかもしれない』と語り、事例2は「(児が)父親という認識を持ってくれたのではないか」という感想を述べた。Klaus&Kennell<sup>4)</sup>は「妻が妊婦らしい身体つきになるのを見ることで、胎内の子どもの存在を意識しはじめ、実際に自分が父親になろうとしていることを意識しはじめるようである」と述べている。それぞ

れの事例における接近得点は、事例4のみ同点であるが他2事例は上昇した。このことから、早期皮膚接触を行うことで児に対する肯定的な感情が上昇したと考えられた。また3事例とも回避得点および拮抗指数が下降した。妊娠中から児を肯定的に捉えている場合においても、早期皮膚接触を実施することで、接近得点を上昇させ、回避得点を下降させることが可能であり、児に対する感情を高める要因となることが明らかとなった。

#### 4. 助産ケアへの示唆

##### 1) 早期皮膚接触実施に向けて

早期皮膚接触実施後『落ち着く、リラックスできた』という語りが聞かれた。室岡<sup>5)</sup>は「“やってみよう”という親自身の気持ちは何より大切である。“やらなくてはいけない”という気持ちを抱かせないように配慮すべき」としている。本研究では事前に早期皮膚接触の方法や手順を説明した。その際、強制的な感情を抱かせないように、参加は自由であることを丁寧に伝えた。その結果、父親が具体的なイメージを描くことにつながり、リラックスできるという父親の心理面に効果的であったと推測された。妊娠期から父親にケアの紹介を行うこと、実施の選択をしてもらうことが重要であると考えられた。

##### 2) 早期皮膚接触の参加者について

本研究では早期皮膚接触中の事故を防ぐ為、研究者は同席し継続して観察を行った。その際、あえて参加者に対する介入を控えた結果、父親が児に対して話しかける、児の特徴について語る様子が見られ、母親の参加も見られた。南田<sup>6)</sup>は「早期接触ではskin-to-skinを実施し、父母のみに参加を促すことが望ましい」と述べている。以上のことから、父親による早期皮膚接触は、母親と同室とすることが望ましいと考えられる。夫婦が相互に関係し合うことや児に集中することが可能となり、効果的な愛着形成や家族形成が期待できると示唆された。

##### 3) 実施後のインタビューについて

室岡<sup>5)</sup>は、「自分の気持ちを自分の言葉で表現することで、父親としての自分を認識でき、父親の自覚が明確になっていく」と述べている。本研究においても『話していると、よりそんな気がしてきた』という語りが聞かれた。早期皮膚接触後に対児感情を表現することで、父親という意識が明確になっていくと推測された。これらの結果から、早期皮膚接触の実施にとどまらず、思いを傾聴する関わりが、その後の父子の絆を深めることに繋がると考えられた。

## V. 結論

1. 正期産児を対象にした父親による早期皮膚接触は、父親の児に対する肯定的感情を高めるとともに、父性意識を高めるケアの一つである。
2. 早期皮膚接触を行うことは、児との愛着形成を促すのみならず、育児動機も高まり、児を家族として受け入れる要因となる。
3. 同室の中で、父と母そして子の相互関係が構築され、親子の関わりが密となり、より効果的な愛着形成や家族形成ができる。

## 研究の限界と課題

実施場所や対象者の条件を変えることで、異なる結果が得られる可能性があると推測された。また今後は、実際の育児にどのような影響を与えるかなど、追跡調査を行っていく必要もあると考える。

## 【引用・参考文献】

- 1) 難波未来(2001.02).カンガルーケアが父性意識に及ぼす効果. 日本看護学会論文集 母性看護,31 号,pp47-48.
- 2) 花沢成一(2001).母性心理学. pp65 : 医学書院.
- 3) 前田美穂,東尾智美,高田仁美(2004.3).パパカンガルーケアの効果について考える 父性意識を高めるための援助. 大阪医科大学附属看護専門学校紀要,10 号,pp47-50.
- 4) MARSHALL H. KLAUS,M.D. JOHN H. KENNEL, M.D.(1982)/ 竹内徹(2002).親と子のきずな.pp79 : 医学書院
- 5) 室岡由美子,村岡美紀子,遠藤志津子,高橋紀美子,古瀬みどり(2007.01).抱っこカンガルーケアによる父親の対児感情の比較.日本看護学会論文集母性看護,37 号,pp60-62.
- 6) 南田智子(2007.12).早期接触での父母や家人の関わり skin-to-skin contact における聴覚的・触覚的刺激の分析.日本母乳哺育学会雑誌,1 巻 2 号,pp111-121.
- 7) 南田智子(2008.04).分娩直後の早期接触に関する研究-ビデオを通じた相互関係の行動観察-. 母性衛生,49 巻 1 号, pp130-137.

第46回 北海道母性衛生学会学術講演会

## 出生後の早期皮膚接触による 父親の対児感情の変化について

旭川医科大学病院 周産母子センター  
木屋まりこ

天竺大学大学院助産研究科教授  
今崎裕子

## I. 諸言

「父性意識の向上や愛着を発揮させるためには  
視覚接触・身体的接触での相互作用が重要」  
(難波・中村・稲田,2001,p47)

⇒早期皮膚接触に関する研究は対象が母子に限局

### ＜本研究の目的＞

父親と出生後の児による早期皮膚接触における  
対児感情の変化を分析することで  
その有効性を明らかにし、助産ケアへの示唆を得る

## II. 研究方法

【調査対象】A助産院または自宅にて出産する産婦、  
新生児、父親の各5名

### 【情報収集】

- ・早期皮膚接触中の様子を参加観察法で収集
- ・早期皮膚接触後に、半構成的面接を実施
- ・妊娠期・早期皮膚接触後の2回、花沢の胎児感情  
評定尺度を用いたアンケートを実施

### 【倫理的配慮】

研究の目的・方法・参加者の権利について、書面と  
口頭にて説明し同意書を回収。なお本研究は、旭川  
医科大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

### ＜対児感情評定尺度の項目一覧＞

| 接近項目一覧  |         | 回避項目一覧  |         |
|---------|---------|---------|---------|
| ①あたたかい  | ③きれいな   | ②さみしい   | ④おそろしい  |
| ⑤うれしい   | ⑦おもしろい  | ⑥たいへんな  | ⑧こわい    |
| ⑨やわらかい  | ⑪ほほえましい | ⑩わがままな  | ⑫うっとうしい |
| ⑬しあわせな  | ⑮うつくしい  | ⑭きたない   | ⑯かなしい   |
| ⑰たいせつな  | ⑲すばらしい  | ⑱にくらしい  | ⑳じゃまな   |
| ㉑たのしい   | ㉓あかるい   | ㉒じれったい  | ㉔きらいな   |
| ㉕かわいらしい | ㉗すてきな   | ㉖めんどくさい | ㉘せつない   |

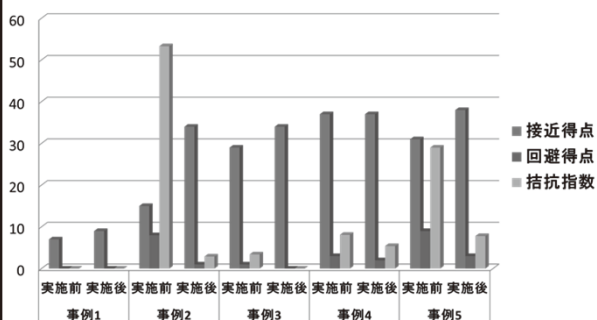
「接近得点」・・・児を愛着的に受容する方向の感情

「回避得点」・・・児を嫌悪的に拒否する方向の感情

「拮抗指数」・・・個人の中で回避感情が優先する事を示す

## III. 結果

### ▼対児感情評定尺度を用いたアンケートの結果



## III. 結果

### ▼父親の対児感情

#### ①率直な感想、②対児感情の変化、③その他

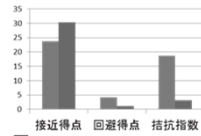
|     |                                                                        |
|-----|------------------------------------------------------------------------|
| 質問① | ・あたたかみがある<br>・体温を感じて、生きているという感じ<br>・落ち着く、リラックスできた                      |
| 質問② | ・出てくるまでは他人事、今は自分の子ども<br>が生まれたという感じ<br>・お腹にいる時とは全然イメージは違う、実<br>感するという感じ |
| 質問③ | ・父親なのだという実感<br>・幸せにしていかなければならない<br>・家族で頑張っていこう                         |



## IV.考察

### 1. 早期皮膚接触の有効性

- ・4事例における接近得点の上昇  
早期皮膚接触を行ったことで  
父親の児に対する肯定的感情が上昇



- ・回避得点、拮抗指数の下降  
父親の児に対する感情が肯定的に変化し、  
児への動機や行動を阻害せず、愛着形成が促進

⇒父親の早期皮膚接触の実施は、児に対する  
肯定的感情を上昇させ愛着形成を促進させる

## IV.考察

### 2. 父親の対児感情の変化

『あたたかみがある』

『体温を感じて、生きているという感じ』

「十分に時間をかけて直接肌と肌とを触れ合わせることができ  
る。児の表情や温もり、鼓動、匂いから児を身近に感じることが  
でき、お互いを生きている存在と認識できる。」

前田(2004,p.49)

⇒児の体温を肌で感じることで、命が誕生したという事実や  
児の存在を認識・実感するといった、父親の心理的な変化

## IV.考察

『幸せにしていかなければならない』

『家族で頑張っていこう』

「父性意識は、子どもとの接触の  
頻度が増すごとに、発展し強められていく」

Klaus&Kennell(1982/2002)

「父親が早期に児と接触する機会をもつことで、  
より児を肯定的に受け入れ育児動機が高まる」

難波(2001)

⇒児を家族として受け入れ、  
父性意識を発展させ、育児動機を高める

## IV.考察

### 3. 変化が無かった点

児に対する思いは『あまり変わらない』と回答した  
(事例2,4,5)

「妻が妊婦らしい身体つきになるのを見ることで、  
胎内の子どもが存在を意識しはじめ、  
実際に自分が父親になろうとしていることを意識しはじめる」

Klaus&Kennell(1982/2002,p.79)

⇒妊娠中から児を肯定的に捉えている場合においても  
早期皮膚接触を実施することで、児に対する感情を高める

## IV.考察

### 4. 助産ケアへの示唆

#### 1) 早期皮膚接触実施に向けて

「“やってみたい”という親自身の気持ちが必要である為、  
“やらなくてはいけない”という気持ちを抱かせないよう

配慮していかかわるべき」 室岡(2006)

→早期皮膚接触に対する具体的なイメージを描くことで  
リラックスして早期皮膚接触が実施できる

⇒妊娠期から父親にケアについて紹介すること  
実施の選択をしてもらうことが重要である

## IV.考察

### 4. 助産ケアへの示唆

#### 2) 早期皮膚接触の参加者について

- ・児に対して話しかける、児の特徴について語る様子
- ・母親とともに第一子の話をするなどの行動

「父母を児に没頭させる効果があることから  
父母のみに参加を促すことが望ましい」 (南田,2007)

⇒母親と同室にする事で夫婦間の関わりも密になり相互的に  
関係し合うこと、児に集中することが可能になり、  
より効果的な愛着形成や家族形成が期待できる

## IV. 考察

### 4. 助産ケアへの示唆

#### 3) 実施後のインタビューについて

「自分の気持ちを自分の言葉で表現することで

父親としての自分を認識でき、父親の自覚が明確になっていく」

室岡(2006)

『話していると、よりそんな気がしてきた』

早期皮膚接触後の率直な感想や、自分の気持ちを表現する事で父親という意識が明確になっていく

⇒ 思いを傾聴する関わりが  
父子の絆を深めることにつながる

## V. 結論

1. 父親による早期皮膚接触は、児に対する肯定的感情を高めるとともに、父性意識を高めるケアの一つである。
2. 早期皮膚接触を行うことは、児との愛着形成を促すのみならず、育児動機も高め、児を家族として受け入れる要因となる。
3. 同室の中で、父と母そして子の相互関係が構築され、親子の関わりが密となり、より効果的な愛着形成や家族形成ができる。

## 研究の限界と課題

・調査対象を「A助産院」または「自宅」で  
出産した母親、児、父親とした

⇒ 実施場所や対象者の条件を変えることで、  
異なる結果が得られる可能性がある

・早期皮膚接触の実施結果からの考察

⇒ 実際の育児にどのような影響を与えるか等、  
追跡調査を行っていく必要がある

## 【引用・参考文献】

- 1) 難波未来(2001.02).カンガルーケアが父性意識に及ぼす効果. 日本看護学会論文集 母性看護,31号,pp47-48.
- 2) 花沢成一(2001).母性心理学. pp65: 医学書院.
- 3) 前田美穂他(2004.3).パパカンガルーケアの効果について考える父性意識を高めるための援助. 大阪医科大学附属看護専門学校紀要,10号,pp47-50.
- 4) 南田智子(2007.12).早期接触での父母や家人の関わりskin-to-skin contactにおける聴覚的・触覚的刺激の分析. 日本母乳哺育学会雑誌,1巻2号,pp111-121.
- 5) 南田智子(2008.04).分娩直後の早期接触に関する研究-ビデオを通じた相互関係の行動観察-. 母性衛生,49巻1号, pp130-137.
- 6) 室岡由美子他(2007.01).抱っこカンガルーケアによる父親の対児感情の比較. 日本看護学会論文集母性看護,37号,pp60-62.
- 7) MARSHALL H. KLAUS,M.D. JOHN H. KENNEL, M.D.(1982)/ 竹内徹(2002).親と子のきずな.pp79: 医学書院.